

「和郭主簿・二一首」について

——陶詩に見る詩情構成の基本的考察——

片岡政雄

陶淵明の詩は含蓄が深く、古来多くの詩人によって優れた作品として推賞されて来たが、しかしそうした理由の理論的解明については、いまなお不十分と言わざるを得ない。思うにこの「和郭主簿・二一首」は、詩情構成はもとより、思想形成上からも淵明の作品中に通じて現われる諸特長を具えるので、一部分の難解点さえ解決すれば確かにその代表作に値いする詩である。本論はかような視点から、この詩を分析検討して、難解点に新得の解釈を与えらるとともに、陶淵明文学を優れた文学として成立させている詩情構成に基本的考察を加えようとするものである。

一

霏霧堂前林	中夏貯清陰	凱風因時來	回飈開我襟
息交逝間臥	坐起弄書琴	園蔬有余滋	旧穀猶儲今
營己良有極	過足非所欽	春秫作美酒	酒熟吾自斟
弱子戲我側	學語未成音	此事真復樂	聊用忘華簪
遙遙望白雲	懷古一何深		

「和郭主簿・その一」はかよう五節に分けられるが、第一節には夏の木陰と涼風の快適を、第二節には閑静な起き臥しに書琴を楽しみ、生活にもゆとりの生じた幸福感を詠じている。第三節にはこの生活に満足し酒を作ったしなむ次第を、第四節には言語をまねる幼児の愛らしさを強調し、これがため仕官を忘れると提示し、第五節にいたり、はるか彼方の白雲を望み、道あるいにしえもかくやと思う旨をもって結ぶ構成である。

なかでも、第二節の冒頭「息交逝間臥」がことに重要な句と考えるが、しかし伝本によっては、「息交遊間業」となっている。思うにこれらの内容は、いずれも「婦去来兮辞」にいう「請息交以絶遊」——世間との交わりをやめて、官遊を絶とう——の趣旨と密着した叙述である。すなわち、「息交逝間臥」とは「世間との交わりをやめ田園に立ち去り静かに臥する」意であろう。また「息交遊間業」の「息交」は、前者と同じく「世間との交わりをやめる」意であるが、以下の三三句「遊間業」が前者とはいささか違う。これは古直に拠れば、「老荘の学に遊ぶ」意とする。これらの「息交逝間臥」にせよ、また

「息交遊問業」にせよ、とにかく変らぬ基準意識は「息交」——世間との交わりをやめる——と「問」——問静——とにあることが明白で、そこには道家的気分への連関性が看取される。かようなわけで、続く第三節・第四節・第五節の表出に当ってはその気分を具体化し、意識内容としてその輪廓を次第に鮮明に描き出している。第三節の冒頭句、「營己良有極、過足非所歛」——おのれの口を養うには一定の限度があるもの、よけいなものは願ひ求めるところではない——に見える生活感情は、「莊子・逍遙遊篇」における「鶴鶩巢於深林、不過一枝、堰鼠飲河、不過滿腹」——みそさざいが深林に巣くっても、なかの一枝のばしよに過ぎず、どぶ鼠が黄河の水を飲んでも、その腹を満たすに過ぎない——という無欲を説くそれと相通じる。この生活感情は堯帝がその賢を聞き天下を譲りたい旨を告げた際に、許由の拒否する理由であるが、これには道家的思想の内在が明らかに察せられる。これが分れば、「息交遊問業」はもとより、詩の冒頭句、「靄靄堂前林、中夏貯清陰」の「林」もまたこの「鶴鶩巢於深林、不過一枝」の「深林」に連動して確かに道家的色彩を濃厚にする語句である。渾明はみずからを鶴鶩——みそさざい——に、堂前に清き陰をたたえる林をわがすまひに見立てる発想が脳裡に浮んだのではなかるうか。それなら「息交遊問業」の異文が「息交遊問業」というふうな「遊」が入って来るのも、実は「逍遙遊篇」に説く「遊び」の精神の反映ということになる。また第四節の冒頭、「弱子戲我側、学語未成音」は、幼児が側に戯れ、ことばをまねながらことばにならないというまた十分には知恵づかない状況を叙している。これを受けた「此事真復樂、

聊以忘華簪」は、そこに真の楽しみを見出し、「華簪」——華やかなかんざしをさす身分——すなわち官遊を忘れる始末であると強調した一聯である。この忘却は涑明が幼児の純真な童心に融合して、そこに人間本来の楽しみを得た結果に生じる恍惚的それである。

この忘却はきわめて重要な詩情構成となるゆえ、特に考察を加えてみよう。涑明の別の文であるが、その自伝「五柳先生伝」に、「忘懷得失、以此自終」、また「祭從弟敬遠文」には、「心遺得失、情不依世」というように、「得失」の忘却を提起している。これに従えば、世間の「得」とする官遊を忘れるのは「失」のほずであるが、これらの「得」「失」を忘れ得る涑明は、より高次の「問静」の悟達に入つて、実はこれを「得」と心得ているからなのである。つまり涑明は、童心に悟入した「問静」の楽しみをより高次の「得」と考へて、世間の「得」とする官遊を忘れ得るのである。これは陶涑明文学に一貫して潜流する注目すべき思弁形式であるから、涑明に見る得失論として明確にしておくべきであろう。しかし、こうした忘却は得失論からだけではなく、別の面からも考へ得るであろう。

「老子・第二十八章」の「知其雄守其雌、為天下谿、為天下谿、常德不離、復歸于嬰兒、云云」は、柔弱清静を守る効果により、「常德」——真のゆるぎなき恒常の徳——が全く備わつて無知柔弱の嬰兒の状態に復歸することを理想とする条である。また「老子・第二十章」の「絶学無憂、唯之与阿、相去幾何、善之与惡、相去何若、……我独怕兮其未兆、如嬰兒之未孩、乘乘兮若無所歸、衆人皆有余、而我独若遺、我愚人之心也哉、沌沌兮、……」には、嬰兒や遺忘について説

く条がある。すなわち、学問による知を絶てば憂いが無いとして、もっぱら心に清静を得るを説き、嬰兒のいまだ笑いを知らざるがごとき無知を尊び、すでに遺忘したるがごとき愚鈍を重んじている。そこで本詩に歌う「弱子戯我側、学語未成音」であるが、これは一見、「実」の表出とのみ考えられやすい。しかし、内実はまことらしき「虚」意識に成るそれであり、したがって秘められてはいるものの、その「実」意識は、老子のいわゆる無知柔弱の嬰兒に復帰する「常德」の会得上にあると、こう解せられる。かよう無知柔弱の「常德」を会得しているので、そこできわめて自然に「忘華簪」、つまり仕官の忘却に入り得るわけで、妙味の溢るる効果的表現になっている。このことは、「実」意識をもって直接に「実」を説くよりは「虚」意識をもって間接に「実」を説く方が、文学的表現効果上においてはより「実」であるという事実を物語るものである。思うにこうした事実、すなわち虚実論は、陶淵明文学の一般的傾向としてその基底に秘められているので、その鑑賞には欠くを得ないものである。かよう「実」は道家思想にあるからこそ、結びの第五節、「遥遥望白雲、懷古一何深」では、「莊子・天地篇」の一節に基づく「白雲」がごく自然に詠出されたものである。 「天地篇」の一節とは、「封人^{そと}曰、始也、我以女為聖人邪、今然君子也、天生万民、必授之職、多男子而授之職、則何懼之有、富而使人分之、則何事之有、夫聖人鶉居鷃食、鳥行無彰、天下有道、則与物皆昌、天下無道、則修徳就閔、千載厭世、去而上僊、乘彼白雲、至于帝郷、……」であって、華の封人——さきもり——が堯帝におのれの見解を述べる個所である。見解の主要点は、男子が多い

なら、これに職を授ければ何の憂いも生じないこと、天下に道が行われない際には徳を修めて「閔」なる生活、すなわち隱遁生活につくと、ならびに「千載」の寿命を得たのち世間に厭きたら去って仙人となり、「白雲」に乗って上帝の郷に至ることの三点である。そしてこれら三点の潜在意識が詩情の流れとして、本詩にも認められるのである。淵明には五人の男児があつたが、そのいずれかは不明にしても一応子をもつ喜びが、「弱子戯我側、学語未成音」の描出に認められるのであって、いわゆる「弱子」とはいくばくか老子の柔弱意識に関連するかも知れない。そして隱遁生活に入るその意識が「息交近閑臥、坐起弄書琴」の詠出に、千載の寿命を得た後の白雲に乗る上僊ではないが、そのあこがれの潜在意識が「遥遥望白雲、懷古一何深」の詠歎に認められるのである。さらには封人のいう「夫聖人鶉居而鷃食」——聖人は鶉が野原にいるようにして居所をえらばず、また母鳥のついでみ与える餌に満足するようにして食をあれこれあさらない——のこの意識は、「靄靄堂前林、中夏貯清陰」をはじめ、「園蔬有余滋、旧穀猶儲今、營己良有極、過足非所欽」に微妙に作用している。がんらい「莊子」、ことにもこの「天地篇」は淵明の慣れ親しんだ篇であつたらしく、その形跡として他の詩中にもよく出て来る。「厲之人夜半生其子、遽取火而視之、汲汲然唯恐其似己也」とは、子を生んだら病患者がおのれの子だけは似ないで欲しいと、夜半に火をともして子の寝顔を見たという切なる親心を記した「天地篇」の一節である。これが淵明の四言詩、「命子」の一節に、「厲夜生子、遽而求火、凡百有^レ心、奚特於我、既見其生、実欲其可、人亦有言、斯情無假」と詠出さ

れている。これは、「らい病やみが夜半に子どもを生み、あわててもし火を求めて顔をみたという。心あるあらゆる親はみなかようなもの。ただ我れだけであるうか。その生れた子を見ては、まことに子のよからんことをねがうもの。むかしの人も言ったことだった。親のこの情にはいつわりがないと。」の詩意で、「天地篇」の故事をきわめて効果的にかつ的確に表現している例である。また「忘乎物、忘乎天、其名為忘己、忘己之人、是之謂入於天」——物を忘れ、天を忘れる。これをおのれを忘れるというのだ。かようおのれを忘れる人を、すでに天のこのころのうちに入ったというのだ。——とは、遺忘の極致を説く「天地篇」の一節である。涑明は「飲酒・その十四」に「不覚知有我、安知物為貴^七」——（酔いのまわるうち）我れのあることなどわかなくなってしまう。なんで物の貴いことなど知るものか。——と詠じているが、これもこの「天地篇」に基づいた諧謔的詠出^八であると知れよう。そのほか涑明の作例としては、「連雨独飲」の「試酌百情遠、重觴忽忘天^九」——試しに酌みかわすうちくさぐさの情も遠くなりゆき、さかづきを重ねるうち忽ち天のあることなど忘れるしまつ。——も、この「天地篇」に拠るものとして容易に背かれよう。こう考えると、「連雨独飲」の「試酌百情遠、重觴忽忘天」はもとより、「飲酒・その十四」の「不覚知有我、安知物為貴」も、みな「莊子・天地篇」に基づいているわけで、その忘却の性格は同じく道家的忘却に属しよう。すでに得失論上、あるいは虚実論上より分析した本詩の「此事真復樂、聊用忘華簪」の忘却も、老子の思想を踏まえて到達している点よりすれば、確かに道家的忘却に属しよう。ただわれわれは、「樂」

「用忘」「華簪」が、その詩情表現の主要素となって詩的展開を示している事実を見逃すべきではない。その「用忘」であるが、これは「もってわする」と訓ずるとおり「以忘」と同格であり、「華簪」は仕官を意味し、仕官が達成されるか否かはまた儒家的知識人の当然に懐く「憂」である。かよう分析してその主要素をつなげば、この一聯は「樂以忘憂」——樂しんでは以て憂を忘る——という意識形態上より構成されていることが分る。これは「論語・述而第七」の「葉公問孔子於子路、子路不對、子曰、女奚不曰、其為人、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至也云爾」に見える孔子の自己批評としての一忘却、「樂以忘憂」を思弁形式として適用していると知られよう。すでに論証して道家的忘却に属するはずの「此事真復樂、聊用忘華簪」であるが、その底辺にはなおこうした儒家的忘却形式の依然として潜む事実をどう解すべきであろうか。それは一見、涑明の思想的矛盾のようを受取られやすいが、けっしてそうではなく、むしろ両思想を受容しかつ融合した事実としての結接点であったと解すべきであろう。こうした結接点である以上、これより詩情がいずれの方向にも融通無礙に拡大する可能性を有するのである。換言すれば、この結接点で両詩情が連動し、反響し交錯して拡大してゆくのである。陶涑明文学が、古来幾多の詩人に愛せられるのも、また鑑賞が多方面にわたるのも、その一因はこの種の秘匿されたカオスの結接点をいくつか有するがためである。それは単なる思想的矛盾の姿としてではなく、人生を考える詩人の対思想の受容心理のそれとして、具体的真実の吐露なのであり、それが陶涑明の詩人たるところであると、こう批評されよう。

「淵明は「飲酒・その十一」に、「(裸葬何必惡、)人当解意表」⁽¹⁰⁾

——人々はまさに意の外なるものを解さねばならぬ——と結ぶが、前の得失論上の機構や虚実論上の機構はもとより、いまこの儒道両家の思想にわたる結接機構もまさにこれに適合するであろう。また意識の流れよりこれらを見るなら、こうした起伏頓挫の機構形式はまさしく律動感そのものの現出であって、淵明の詩が余韻を長く引く一因も実はこれに乗せた詩情内容が、あるいは儒家的思想にあるいは道家的思想に相連動し反響し交錯して拡大してゆくからなのである。これを簡称するならば、連動響交論とでもいふべきであろうが、淵明における詩情を分析して、その製作心理をたどると、こうした論の内実がすでに造成されていたことを発見するのである。

二

「和郭主簿・その一」はかような構成であるが、次には「その二」を考察せねばならない。思うに前首は仲夏、すなわち真夏の作であるに対し、後首は秋のそれ、事実は初冬に入って間もない十月のそれで、その間に数個月の時日を置くが、その生活感情なり思弁態度なりはいったいどう展開していったであろうか。ここではその主要素材たる「松菊」の対句構成の意識を追究分析すれば、淵明の作品における詩情の本質をより明かにし得るというものである。

和沢周三春 清涼素秋節 露凝無游氛 天高南景澈
 陵岑聳逸峯 遙瞻皆奇絶 芳菊開林耀 青松冠巖列
 懷此貞秀姿 卓為霜下傑 銜觴念幽人 千載撫爾訣

「檢素不獲展 厭厭竟良月」

かよう四節より成る詩であるが、第一節はつかの間に春も過ぎ、迎えた涼秋の澄み切った天象を歌い、第二節は奇絶の山陵をその背景に林前に咲く菊や巖上に立つ松の情景を描き、色彩的にも一際引立って鮮明な印象を与える。第三節はその松菊の姿態とこれに対する情懷であって、第四節は全体の結びとしての感懷、いわば悠悠自適のそれである。これを要するに、第二節・第三節は詩の中心素材たる松・菊について歌い上げられ、結びの第四節の感懷も松・菊の心象に拠る成立が指定される。

いったい中心素材たる松・菊の心象とはいかなる性格のものであるか。中心素材たるがゆえに、ここで先ずこの心象の形成過程を明確にしてから立論するのがその順序であろう。がんらい松や菊は秋冬の季節をいろどって、その耐寒・不変・孤独の姿態が多く、詩人の目をひきしきりと讚美される。それゆえ、耐寒・不変・孤独が松・菊の本来的な心象として形成されてくるわけで、これを即物的心象と呼称して妥当であろう。この即物的心象は物それ自体の本質をそのまま心に描き浮べるのであるが、しかし観ずる主体が人間である限り、それに関連して附随的に人生的思考ないし価値判断的思考が心裡の深層に生起しがちなことは、われわれの経験上またごく自然な事象である。かようなわけで、松・菊の即物的心象を人生的具象ないし価値的具象と解する態度をとるようになって、心象もまたそれにつれて次的にいささか転化する。例えば、耐寒・不変・孤独が松・菊の即物的心象であったが、その耐寒心象上よりは経済生活上の耐乏とか耐貧とかの

類の心象が派生するし、またその不変の心象上よりは道義心上の清節とか貞節とか高節とかの操守の類の心象が派生する。そしてそれぞれが価値づけられ連合して、孤高ひいては脱俗の心象が派生するというふうには拮がるのであるが、これらの心象に基づく実践は、要するに高次の理念に生きる人のみがよくすることであるから、これを総べて理念的心象と呼称し得よう。そしてこうした理念的心象の高まりが、松・菊それ自体に生きた人格を感じとり、ついに擬人法が採択されにいたるが、これは新たに人格的心象が形成された事実を意味するわけである。大筋ながら、これが松・菊に見られる心象の一般的形成過程で、溷明の詩もこれによって歌い上げられているものようである。

さて詩の第二節は、はじめに山々の遠景について、「陵岑聳逸峯、遥瞻皆奇絶」——丘陵、ごしに高い峰がそびえ、遙かに見やればいずれもめずらしき絶景——と逸峯の奇絶を称え歌う。これに続き菊と松との近景について、「芳菊開林耀、青松冠巖列」——かぐわしき菊が林を開くがごとくかがやき、青き松が巖に冠を頂くがごとくならぶ——と歌い上げるのである。おそらく松・菊の描写は上下の関係において拘えられた情景に違いなく、松は巖上に「列」ぶものとして詠ぜられているから並木であろうし、手前の林を開かんばかりに「耀」く菊ももちろん叢生であろう。それにしても、「逸峯」「奇絶」をその背景としたかような松・菊の超俗的配置の描写は、松・菊の心象たる孤高性を一層鮮烈に印象づける。

なお「その一」で提起した虚実論上よりこれを立証しようか。この「陵岑聳逸峯、遥瞻皆奇絶」とは、山の実景として一応「実」のよう

に見えるが、その意識の内実はすでに「虚」であって、その「実」は以下の句「芳菊開林耀、青松冠巖列」に現われる菊を含めての松の「奇」の上にある。換言すれば、「陵岑聳逸峯、遥瞻皆奇絶」の「奇」とは、「菊」を含めての「松」の「奇」の先取り意識と言える。というのは、溷明の別の作に、「青松在東園、衆草没其姿、凝霜殄異類、卓然見高枝、連林人不覺、獨樹衆乃奇、提壺挂寒柯、遠望時復為、吾生夢幻間、何事繼塵羈」(「飲酒・その八」と、「松」の「奇」を讀んでいるからである。すなわち、「松」の即物心象たる「耐寒」「不変」「孤獨」、ならびにこれより派生する理念心象の「孤高」「脱俗」の現出を「奇」と讚え、その枝を手と見立てて酒徳利を獻ずる意識を、「連林人不覺、獨樹衆乃奇、提壺挂寒柯、遠望時復為」と詠じているからである。

かようなわけで、「孤高」「脱俗」に生きる「松」「菊」は「奇」ということになるが、これをそのまま俗塵に汚されない人傑の貞潔秀麗なるに擬して懷慕する心情が、「懷此貞秀姿、卓為霜下傑」であって、第三節冒頭の一聯である。さらに言えば、傑人の貞潔秀麗の純粹な持統は、目先の俗務を超越した「幽人」すなわち隱者にしてはじめて可能なわけで、そこにはそれなりの極意なり秘訣なりがあつてしかるべきであろう。こうした意識過程のもとに、「銜觴念幽人、千載撫爾訣」——さかづきを口にふくみて隱者のそなたを懐い、(千年のうちにまでも)とわにそなたの生きかたの秘訣をしよう——が、次に歌い継がれたと見られる。中の「銜觴」——さかづきを口に含む——の意識には、「飲酒・その八」の「提壺挂寒柯、遠望時復為」が松のえ

だに酒を勧める意識であるごとく、相手の「松」「菊」に酒を勧める親近感が含まれている。またその「千載」は、松・菊の即物心象たる「不変」、ないしはその理念心象たる「不老長寿」や「永遠」より反射した意識にはかならない。かよう第三節を考察すると、その「霜下傑」といい、「幽人」といい、またこれを受ける「爾訣」の「爾」といい、すべて菊や松の擬人化、つまり人格的心象の具体的形成ということになる。

それゆえ本詩に詠せられる松・菊は一景物としての点描的素材ではけつてなく、おのれも隠者であった洙明の実人生における孤高の理念はもとより、永遠の理念の形象化でもあったと言えよう。もしこれに虚実論を適用すれば、松・菊の叙景的描写は「虚」であり、「実」は洙明の実人生における理念の詠出ということになる。こうした意識をもって、松・菊の理念的心象に規範を求めているわけであるから、これを指さして「幽人」と呼び「爾」と称える人格的心象の実質が次第に形成されて、そこでこの擬人法の発想となったわけである。

次に本詩の結びの第五節は、松・菊の即物的心象たる耐寒・不変・孤独や理念的心象の孤高・不老不死・永遠より触発されて到達した世界、すなわち自らの理念世界に安静の満足を得て、「検素不獲展、厭竟良月」と詠ぜられている。この結びの一聯の意義であるが、はじめの「検素不獲展、」が、その眼目というべきであろう。これはおそらく、「乙巳歳三月為建威參軍、使都經錢溪」と題する詩中の一聯、「一形似有制、素襟不可易」——この体はしばらくいられているようだが、平素からの心はかえることはできない——の意に該当するであろう。

なぜなら「説文解字」に拠るかぎり、「展」の本義は「転」、すなわち「ころばす」であって、詩経・邶風「柏舟」の「我心匪石、不可転也」——わたしの心は石ではないから、転ばすことはできない——を密かに移入したものはなからうか。この「我心匪石、不可転也」は洙明の特に慣れ親んだ一聯といえ、擬古・その三」では、この前句を結びの聯に嵌入して、「我心固匪石、君情定何如」と詠じている。かようなわけで、その後句「不可転也」の代替として、その意識にほとんど相近い「不獲展」の用いられたのが、本詩の「検素不獲展」と解しても、あなたがち不思議ではあるまい。洙明が「柏舟」篇より影響を受けた事実は、何もこの二句に限るものではない。「菊」と関連をもつ例ということになるが、「飲酒・その七」の冒頭四句、「秋菊有佳色、露凝其英、汎此忘憂物、遠我遺世情」の「忘憂物」がそれである。この「忘憂物」とは酒を意味し、実は同じくこの「柏舟」篇の詩句、「微我無酒、以遨以遊」の毛伝「非我無酒可以遨遊忘憂」に基づく、諧謔的隠語表現である。かよう注にまで目を通してこれを採るほどに、洙明はこの篇を誦熟し愛好したものである。それゆえ、「検素不獲展」とは、「平素の志を検証するに石を転がすようには改め得ない」の意と解せられるのである。こうした確固不動の志向対象は、「懷此貞秀姿、卓為霜下傑」の一聯に窺われるとおり、松・菊の心象的把握より形成された理念、すなわち「耐貧」「孤高」「脱俗」「永遠」等々ということになる。心象的把握たるこれらの理念がその志向の不動に連動する例は、ひとり松・菊の詠出のみに限るものではなく、「柏」についても同様に現われる。「検素不獲展」の意

が、「乙巳歳三月、為建威參軍、使都經錢溪」の一聯、「一形似有制、素襟不可易」のそれに該当するについては、すでに説いた。その詩中には、「園田日夢想、安得久離析、終懷有壑舟、諒哉宜霜柏」と歌われているが、「素襟不可易」に窺われる不動の志向対象も、実はこの「柏」の心象的把握より形成された「耐貧」「孤高」「脱俗」「永遠」等々ということになる。かよう「檢素不獲展」と「素襟不可易」とは、ともに松・菊や柏の心象に連関して、その志向が相一致する。この点につき、さらに他の文献上より論証を試みよう。顧みるに、本詩の「懷此貞秀姿、卓為霜下傑」も、またこの「終懷有壑舟、諒哉宜霜柏」もともに「霜」に触れるが、これは「論語・子罕第九」に見える孔子の語、「歲寒、然後知松柏之後彫也」より出ているに違いない。さらに「莊子・讓王篇」に同じく孔子の語として引く、「天寒既至、霜雪既降、吾是以知松柏之茂也」の表現意識をも斟酌すれば、ゆるぎなき確証となり得るはずである。かよう孔子の語に基づく松・柏の心象的把握上から、その志向を「檢素不獲展」とか「素襟不可易」とか歌い上げるのであるから、両句の趣きが相一致するのは当然である。これを要するに渾明における素志の不変は、孔子の語に現われる松や柏の諸心象を中心にさらに菊のそれをも加え、心理上相互に作用し合って成っていることがわかる。

いったい「松」「柏」の諸心象が、「菊」をもともなって相一致するのは、風物上の現象的側面に拠るばかりではなさそうである。なるほど現象的側面より考えると、「不変」がこれらの即物的心象となり、「不老長寿」や「永遠」をこれより派生してともにこれらの理念

的心象を形成している。しかし、「不老長寿」の理念的心象は、思いがけないことに、葉効上からも形成され得ることは、「本草綱目」の記述より容易に推測される。「本草綱目・第三十四卷」には、「柏」の古字「榭」を「榭音菊」とし、かつその実が不老長寿や身を軽くする上に卓効があるととして、「久服令人潤沢美色、耳目聰明、不飢不老、輕身延年」と説いている。また同じく「松脂」——まつやに——の条には、「頌曰、道人服餌、或合茯苓・松柏実・菊花作丸、亦可單服」と見え、道人すなわち仙人の服薬には、松や柏の実、ならびに菊の花が用いられているが、要は不老長寿の葉効を期待するがためと解せられる。葉効上より不老長寿の理念的心象が形成される理由はこれで分るのであるが、しかしこの不老長寿とは換言すれば、不変・永遠ということになり、また風物上の現象的側面より得た諸心象の「不変」や「永遠」とも相一致するのである。いづれにしても、本詩の「檢素不獲展」は単に操守の堅固を歌ったものではなく、実は松・菊の「不変」や「永遠」の心象にも密着させて、より詩的な表現になっていると知られよう。かように永遠に変らぬを誓った素志であるだけに、もしこれを失うことでもあったらどうであろうか。それは「飲酒・その十五」に「若不委窮達、素抱深可惜」——もし窮達（^ニ）のなりゆきにまかせなかつたら、素志をうしななって深く惜しむことになる——と詠ずるがごとく、渾明にはもとより痛惜すべきことに違いない。なぜならこの「素抱」とは、前述の詩句「一形似有制、素襟不可易」の「素襟」と同義語であると同時に、「檢素不獲展」の「素」とは、これら「素襟」「素抱」を一類として簡称した表出に違いないからである。それなら

「檢素不獲展」に続く「厭厭竟良月」は、これをいかに解すべきであるか。このばあい特に問題となるのは、「厭厭」ならびに「良月」についてであろう。前者の「厭厭」とは、「詩経・秦風」の「小戎」に「言念君子、載寢載興、厭厭良人、秩秩德音」と見えるそれで、「毛伝」に注解する「厭厭安静也」の意とされる。洵明には別に、「漢の疏広・疏受の賢を歌う」「二疏」と題する詩があり、これにも「厭厭閭里歎、所管非近務」と「厭厭」の語が見えて、また「安静」の意に取られる。なぜなら「厭厭」とは、朝廷の榮職を辭し去り、郷里の近隣と親しみ交わって満足する兩人の心の安静状態に関わる語で、両句は「心安けく帰郷の歎びにひたり、することは目先のことではない」と解せられるからである。「厭厭竟良月」の「厭厭」とはかよう「安静」の意に帰するが、それなら後者の「良月」とは、いかなる意識で詠出されたものであろうか。これはおそらく、「左伝・莊公十六年」の条に、「九月殺公子闕、刱強鉏・公父定叔出奔鄭、三年而復之、曰、不可使共叔無後於鄭、使以十月入、曰、良月也、就盈数焉」と見えるその「良月」で、すなわち十月を盈ち足りた良い数とする意識をもって呼称したことが分る。かよう「良月」の呼称は盈ち足りた意識のもとになるゆえ、「厭厭」の語義たる「安静」とも情念的に相密着してくる。これを要するに「良月」とは、月夜を良しと称える類の意識ではなく、曆日上の月に情念上の内容、すなわち満ち足りた安静の気分をもこめた意識の呼称であろう。かようなわけで、結びの第五節の「檢素不獲展、厭厭竟良月」は、「平素の心をあらためるにやばり変えられるものではない、このまま安らかに静けく十月をすごす」

という意になる。要するに、松・菊の心象より形成された孤高・永遠の理念世界に安住し得た満足を歌い上げたことになる。

思うにこの詩も洵明の代表作の一つとしてよく引かれるが、結びの表現効果、すなわち「檢素不獲展、厭厭竟良月」のそれについては、さらにその得失論からも追究せねばならぬようである。いったい「素」すなわち仕えないとする洵明の平素の志は、一般的見地よりすれば明らかに「失」である。したがって洵明がその志を変え転ずるなら、一般的見地よりすれば「得」ということになる。しかるに洵明は別に高次の理念世界、すなわち松・菊の心象から形成された理念世界に立ち、これより一般的見地の「得」「失」を超越して、実は「得」の心境にあり、それでおのずから安静の気分ひたって歌い上げているのである。この「得失論」の機構形式は潜在的ながら、われわれの意識の流れに一種の律動感を催おさせるが、実はこの律動感に安静の気分を乗せているから、この詩が無限の余韻を引くものと解せられる。

三

「和郭主簿・二首」の诗情について、文献的に、あるいは心理的に、あるいは現象的に種々の面から考察し論述したが、それなら「その一」「その二」の相互間にいかなる連関があるか。「その一」は「靄靄堂前林、中夏貯清陰」にはじまるに對し、「その二」は「和沢周三春、清涼素秋節」にはじまる。すなわち「その一」は夏の季節であるに對し、「その二」は秋のそれであるが、しかしそれぞれ「清陰」「清涼」というふうに、そこに「清」の気分を見出しているのはとも

に同じである。これは澗明がその心境の清高を先ずこれらに託する意識であろうが、それゆえ「その一」が「遙遙望白雲、懷古一何深」と空に高く浮ぶ白雲をもって結ぶのであり、「その二」が「露凝無游氛、天高肅景澈」と「天高」をもって第二節を結ぶのである。また「その一」第二節は「息交遊間臥、坐起弄書琴」と、「間靜」な意味にはじまるが、「その二」は「檢素不獲展、厭厭竟良月」というふうに「間靜」と理念上相通じる「安靜」の気分、すなわち「厭厭」をもって歌い収められる。さらには「その一」「第四節」の「弱子戯我側、学語未成音、此事真復樂、聊用忘華簪」と、「その二」第三節の「懷此貞秀姿、卓為霜下傑、銜觴念幽人、千載撫爾訣」との対比に基づく相似性の考究もおろそかにし得まい。前者は「弱子」すなわち幼児の片言に天真爛漫を見出して俗事の忘却を歌い上げるのであるが、これに対し後者は松・菊の姿態に貞潔・秀麗を感じ取し超俗高逸の幽人に擬して、その操守の秘訣を敬慕するのである。かよう両首は超俗の詩情として相一致してくるのであり、要するに、幼児の動作言語より内発する真実を契機に脱俗的忘却に入って哲学的であるか、松・菊の心象上より超俗的幽人を擬定してより文学的であるかがその主要な相違点であろう。例の酒については、「その一」の第三節に「春稼作美酒、酒熟吾自斟」と結び、「その二」の第三節に「銜觴念幽人、千載撫爾訣」と結ぶが、けっきよくはいずれも独酌という点で相一致してくる。がんらい澗明は酒を詠ずると、ことにも菊花を配してこれを詠ずると、これまでの例にも窺われたごとく、直接と間接とを問わず忘却心理に入るのがその傾向である。「その一」に「此事真復樂、聊用

忘華簪」と詠じたのは、菊を点じないものの酒が間接的に忘却心理に作用した一例として挙げられよう。これに対し、「その二」は菊も酒も点ぜられながらも、直接的には忘却自体になら触れるところのない作である。しかし「銜觴念幽人、千載撫爾訣」における意識は、前述の論証のように松・菊を擬人化し、これと杯を交し合う願望に違いないが、その心理の内実はすでに忘却に近い恍惚状態にあったはずであると、こう批評し得よう。

注(一)「掃去來今、請息交以絶游、世与我而相違、復駕言兮焉求、」
「文選」には「世与我而相違」となっている。

(二)「世界古典文学全集二五」(筑摩書房)所収、一海知義訳、「陶淵明」一五九頁に「古直は『礼記』を引いて、間業は「正業すなわち儒家の古典である六経をおさめることに対し、老荘の書をよむことと説く、いまこれに従う。」に拠る。

(三)「鶴鶴巢於深林、不過一枝、堰鼠飲河、不過滴腹」この文の「郭注」に「鶴鶴一枝、堰鼠滴腹、言性各有極、苟足其極則餘天下之財也」とあるが、陶詩の用語と相通じる。

(四)「五柳先生伝」には、忘却が二個所に出ている。「好讀書、不求甚解、每有会意、便欣然忘食」と、この「常著文章自娛、頗示己志、忘懷得失、以此自終」とである。

これらの忘却の詳細については、かつてわたしの発表した左の論文に譲る。

一九六七年五月二十日発行「集刊東洋学・第十七号」・「陶淵明文学における『遺』『忘』の成立——三系列の設定とその統一理念ならびにその表現効果——

(五)「後己先人、臨財思惠、心遺得失、情不依世」とあり、敬遠の徳行を讚美した文になっている。

(六)「堯觀乎華、華封人曰、嘻聖人、請祝聖人。使聖人壽、堯曰、辭、使聖人富、堯曰、辭、使聖人多男子、堯曰、辭、封人曰、壽富多男子、人之所欲也、汝独不欲何邪、堯曰、多男子則多懼、富則多事、壽

則多辱、是三者、非所以養德也、故辭」に続いて、この文となるのである。文中の「千載」の語は、「その二」に用いられて注目される。

(七) 「飲酒・その十四」の全詩は下記のとおり。「故人賞我趣、挈壺相与至、班荆坐松下、數斟已復醉、父老雜亂言、觴酌失行次、不覚知有我、安知物為貴、悠悠迷所留、酒中有深味」

(八) これら諸譚の詳細については、かつてわたしの発表した左の論文に譲る。

一九六三年五月二十日発行「集刊東洋学・第九号」「陶淵明における諸譚の系譜」

(九) 「連雨独飲」の全詩は下記のとおり。「運生会帰尽、終古謂之然、世間有松喬、於今定何間、故老贈余酒、乃言飲得仙、試酌百情遠、重觴忽忘天、天豈去此哉、任真無所先、雲鶴有奇翼、八表須臾還、自我抱茲独、僊倪四十年、形骸久已化、心在復何言、」

(一〇) 「飲酒・その十一」の全詩は下記のとおり。「顔生稱為仁、榮公言有道、屢空不獲年、長飢至于老、雖留身後名、一生亦枯槁、死去何所知、称心固為好、客養千金軀、臨化消其宝、裸葬何必惡、人当解意表」

(一一) 陶澍の「靖節先生集」では「提壺挂寒柯」の「挂」に注して「何本云、一作撫」と述べている。もしこれに従って「提壺撫寒柯」とすれば、「帰去来兮辞」の「景翳翳以将入、撫孤松而盤桓」が想起される。

(一二) 「卓為霜下傑」の「卓」とは、前の「卓然見高枝」(飲酒・その八)の「卓然」に同じく、ぬきんでるさま。

(一三) これは「易」の「履卦九二」に見える「履道坦坦、幽人貞吉」の「幽人」で、別に四言詩「命子」中にも、「紛紛戦国、漠漠衰周、鳳隠于林、幽人在邱、……」とも引くとおり、まさしく隠者のいいである。

(一四) 「乙巳歳三月為建威參軍、使都絳錢溪」の全詩は下記のとおり。
「我不踐斯境、歲月好已積、晨夕看山川、事事悉如昔、微雨洗高林、清麤矯雲翮、眷彼品物存、義風都未隔、伊余何為者、勉勵從茲役、一形似有制、素襟不可易、田園日夢想、安得久離析、終懷在壑舟、諒哉宜霜柏、」

(一五) 許慎「說文解字」に「展」について、「展轉也、从尸、𠂔省声」と説いているとおり「展」の本義を「転」としている。

「詩経・周南・閔睢」の第四章に、「求之不得、寤寐思服、悠哉悠哉、輒転反側」と見える。朱子注「詩集伝」に、「輒者転之平、転者輒之周、反者輒之過、側者輒之留、皆臥不安席之意」とある。

また段玉裁の「說文解字注」には、「展者未転而將転、陸德明云、字林作輒、然則周南作輒転非古也、」

(一六) 「詩経・邶風・柏舟」の第一章に、「汎彼柏舟、亦汎其流、耿耿不寐、如有隱憂、微我無酒、以敖以遊」(「毛伝」に「非我無酒可以遊遊忘憂也」)と見え、その第三章には、「我心匪石、不可転也、我心匪席、不可卷也、威儀棣棣、不可選也」と見える。

(一七) 「擬古・その三」の全詩は下記のとおり。「仲春遘時雨、始雷發東隅、衆蟄各潛駭、草木從橫舒、翩翩新來燕、雙雙入我廬、先巢故尚在、相將還旧居、自從分別來、門庭日荒蕪、我心固匪石、君情定何如、」

(一八) 「飲酒・その七」の全詩は下記のとおり。「秋菊有佳色、裊露擿其英、汎此忘憂物、遠我遺世情、一觴雖獨進、杯盡壺自傾、日入羣動息、歸鳥趨林鳴、嘯傲東軒下、聊復得此生」ただし「遠我遺世情」の句は、文選では「遠我違世情」となっている。

(一九) 「飲酒・その十五」の全詩は下記のとおり。「貧居之人工、灌木荒余宅、班班有翔鳥、寂寂無行迹、宇宙一何悠、人生少至百、歲月相催逼、髣邴早已白、若不委窮達、素抱深可惜」

(二〇) 「詩経・秦風・小戎」の第三章の後半。
(二一) 「二疏」の全詩は下記のとおり。「大象転四時、功成者自去、借問衰周來、幾人得其趣、游目漢廷中、二疏復此舉、高嘯返旧居、長揖儲君傳、餞送傾皇朝、華軒盈道路、離別情所悲、餘榮何足顧、事勝感行人、賢哉豈常譽、厭厭閭里飲、所營非近務、促席延故老、揮觴道平素、問金終寄心、清言晬未悟、放棄衆餘年、違恤身後慮、誰云其人亡、久而道彌著、」

付記

本稿の要旨については、昭和四十五年五月三十一日の第十九回東北中国学会大会において研究発表(口頭)をしている。